

3) 義歯表面黒色部、白色付着部、人工歯
元素分析により、それぞれ、お歯黒、歯石、蠍
石と分析した。

6) 『雨月物語』にみる秋成の口腔観（そ の2）

“Ugetu-Monogatari” and Dentistry (Part 2)

医の博物館 西巻 明彦
日本歯科大学 屋代 正幸

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*
Masayuki Yashiro, *Nippon Dental University*

『雨月物語』は、上田秋成（1734～1809）の著で、1776年の刊行である。上田秋成は、国学者であり医師でもあるが、『雨月物語』刊行時は嶋屋の当主であった。嶋屋が火災により焼失して破産した後に医師へ転職している。『雨月物語』は、五巻本で、巻之一「白峰」、「菊花の約」、巻之二、「浅茅が宿」、「夢応の鯉魚」、巻之三「仏法僧」、「吉備津の釜」、巻之四「蛇性の姪」、巻之五「青頭巾」、「貧福論」で構成されている。この話は、それぞれ円環状に配列されると同時にそれぞれ対応性に作成されていることが大きな魅力のひとつとなっていると言われている。今回、その中の「夢応の鯉魚」をとりあげ、秋成の口腔観の一端を考察した。

「夢応の鯉魚」は、仮死状態になった僧が、夢の中で鯉に変身し琵琶湖を泳ぎまわるが、漁師により上げられ鱠にされる寸前に生き帰るという物語である。「夢応の鯉魚」の原典は、白話小説「薛録事魚服証仙」（『醒世恒言』）、「魚服記」（『古今説海』説話集）、『太平廣記』、さらに日本の『古今著聞集』がたくみに組み込まれている。本編には一図、絵が挿入されている。

「夢応の鯉魚」の背景となっているのは、風景描写の美しさで、「まづ長等の山おろし、立ゐる浪に身をのせて、志賀の大湾の汀に遊べば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚されて、比良の高山影うつる、深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつなき。ぬば玉の夜中の渦にやどる月は、鏡の山の峰に清て、八十の湊の八十隈もなくおもしろ。沖津鳩山、竹生嶋、波にうつろふ朱の垣こそおどろかるれ。さしも伊吹の山

風に、旦妻船も漕出れば、芦間の夢をさまされ、矢橋の渡りする人の水なれ棹のがれては、瀬田の橋守にいくそたびか迫れぬ。日あたたかなれば浮び、風あらきときは千尋の底に遊ぶ。」とある。この描写に対して三島由紀夫は、「秋成の企てた窮屈の詩」と絶賛している。これは、鯉になった主人公の興義が、夢の世界に遊ぶ重要な描写である。物語は、仮死→夢→夢と現実の間→現実と転回している。興義は、仮死状態の夢の中で海若より、權に金鯉が服を授けて水府のたのしみをさせ給ふ。只餌の香ばしきに昧まれて、釣の糸にかかり身を亡ふ事なれ。」と、捕食による身の破滅を注意される。それに対し興義は、水中に遊ぶもやがて、「急にも飢て食ほしげなるに……中略……遂に餌をのむ。文四はやく糸を収めて我を捕ふ。」と記され、捕食により漁師にとらえられてしまう。莊子齊物論第二にみえる「昔は莊周夢に胡蝶と為る。栩々然として胡蝶なり。自ら喰しんで志に適するか、周たるを知らざるなり。俄然として覺むれば則ち遽々然として周なり。知らず、周の夢に胡蝶となるか、胡蝶の夢に周と為るか。」という寓言が背景に存在する。本来夢の世界で空腹になるという事は少ないと考えるが、空腹というキーワードは、現実世界に戻るひとつのシグナルであるし、捕食という行為が夢の世界と現実の世界の扉となっていることが注目される。秋成の怪異性は、この後、鯉の興義が、壇家の平の助の館で鱠とされる寸前で蘇生する点が現実世界として描かれている点にある。つまり、夢の世界と現実世界が時間と空間において合致しており、「『仏弟子を害する例やある。我を助けよ我を助けよ』と哭叫びぬれど聞入ず。終に切るとおぼえて夢醒たり」と記され、続いて『人々大に感異しみ、「師が物がたりにつきて思ふに、其度ごとに魚の口の動くを見れど、更に声を出す事なし。』』とあり、夢の世界のでき事は、発音として現実世界に伝わらないことが物語られている。また、前半において興義が仮死状態に陥っている時に、「只心頭（むね）あたりの微の暖なるにぞ」という文章があるが、魚服記には「心頭（しんとう）微かに暖かなり」とあり、「心頭」は本来上焦部分に相当するが、『雨月物語』には、「むね」と読ませており、身体名がしだいに限局して使われている傾向もうかがえる。

「夢応の鯉魚」の中で、口腔は夢世界と現実世界をつなぐ扉として機能しており、口腔における発音は、夢世界と現実世界では互いに通じることができない現象としてとらえられている。このことは、上田秋成が異文化同士の交流がかならずしもうまくいかない怖さを、発音に押していたのではないかと考える。また、挿絵図に興義が鯉の口から飛び出してくる図が描かれているが、このことも「夢応の鯉魚」の中で、口腔が中心的な位置を占めていると考えられる。

7) 『温疫論』と口腔の関連性の考察

“Uneki-Ron” and Dentistry

医の博物館 西巻 明彦
日本歯科大学 屋代 正幸

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*
Masayuki Yashiro, *Nippon Dental University*

『温疫論』は、明代の呉有性の著である。温病そのものは、温邪による急性外感熱病で、伝染性のものが多いためとされている。温病の名称そのものは、『内經』にみられ六元正紀大論は「民癟温病」、「温病乃作」の記述がある。『傷寒論』には、「太陽病・発熱して渴し、惡寒せざるもの温病と為す」と記され、清熱を治療の根本においている。『諸病源候論』卷十温病諸候には、「病氣転じてあい染み易く、乃ち滅門に至り、外なる人にも延及す」と述べ、伝染と流行に温病の特徴があることが主張である。金元医学の時代、劉完素は、辛温大熱の薬から辛涼の薬を問いただしている。明代初頭には、「温病は傷寒と混称することを得ず」と王履は述べ、裏熱を清すことの重要性を訴えた。日本においては、伝染の概念については、橋本伯寿の『断毒論』以降といわれているが、すでに『諸病源候論』には、伝染、流行が記載されており、『諸病源候論』は奈良時代から平安初期には日本に入っていることから、かなり早い時期から日本に伝染、流行の概念は入っていると考えることができる。

中国伝統医学において、伝染、流行の概念が大きく変わるのは、呉有性（1582～1652）の『温疫論』（1642）で、1641年に山東や浙江などで疫病が流行した際、医師が従来からの傷寒の治法では効

果がなく、死者が多数でたことが発端と言われている。このような背景には、ルネサンス以降科学技術の発展により大航海時代をむかえ、病気が比較的早く全世界に流行することと関係がある。呉有性は『温疫論』卷之一「原病」で「疫を病むの由は、昔以為らく其の時に非ずして其の気に有り。春温なるに応じて反って大寒、夏熱なるに応じて反って大涼、秋涼なるに応じて反って大熱、冬寒なるに応じて反って大温す。非時の氣を得て、長幼の病相似たるを以て疫となす。余が論は則ち然らず。夫れ寒熱温涼は乃ち四時の常、風雨陰晴に因つて稍損益をなす。仮令ば秋の熱は必ず晴多く、春の寒は雨多きに因る。之を較ぶれば亦天地の常時にして、未だ必ずしも疫多からざるなり。」と述べ時気や伏邪の存在とは異なるものに原因を求めるようとしている。さらに「傷寒は中暑とは天氣の常気に感ず。歲運に在りて多寡有り。方隅に在りて厚薄有り。四時に在りて、盛衰有り。此の氣の来る、老少強弱を論ずること無く、之に触る者は即ち病む。邪口鼻従りして入れば、則ち其の客する所、内蔵府に在らず、外經絡に存らず、夾脊の内に舍り、表裏の分解、是を半病半裏となす。即ち鍼経に横に募原に連なると謂う所是れなり。」と記し、口腔、鼻腔から感染することを主張している。『内經』以来、外邪の侵入は皮膚を通して行なわれることが一般的であったが、口腔を感染経路と述べられたことは、中国伝統医学においてひとつの転換点であった。感染経路に口腔が挙げられたことは、舌診や駆虫の発達にも大きな影響を与えたことと考えができる。呉有性は、「それ温疫の病をなすは、風に非ず、寒に非ず、暑に非ず、湿に非ず、すなわち天氣の間、別に一種の異氣ありて感ずるところ」と記し、又「それ疫は、天地の戾氣に感ずるなり。戾氣とは、寒に非ず、暑に非ず、暖に非ず、涼に非ず、また四時交錯の氣に非ず、すなわち天地の間、別に一種の戾氣あり。」と、戾氣の存在を主張している。これは、「百病はみな六氣より生ずる」という概念を破るために、後世議論を呼ぶことになる。『温疫論』は、比較的早く日本にも伝来し、江戸時代中期から後期にかけての医家に大きな影響を与えた。『断毒論』も、この影響を強く受けしており、『温疫論』の中に「邪の着く所、天受有り、伝染有り」の記載のある事から、「伝染」という概念が『断毒論』か